



## 水の事故から子どもを守ろう!

～夏に多い水難事故～

夏休み真っただ中。海や川、プールなど水辺でのレジャーを楽しむ機会が多い季節。そこで心配なのが水の事故です。みなさんは、年間でどのくらい水の事故が発生しているか、ご存知ですか。

平成23年中の水難の概況(警察庁統計 平成24年6月21日発表)

	全体	うち中学生以下の子ども
水難事故発生件数	1396件	188件(13.5%)
水難者数	1656人	269人(16.2%)

この水難事故発生件数のうち、49.7%が6～8月に起こっています。場所別では、海が45.9%、河川が33.6%です。子どもの水難事故も、同様の傾向があります。子どもの水難事故防止は親や周囲の大人の注意が欠かせません。

- ①子どもから目を離さない。(大人が目を離した少しの間に起きている事故が多い。)
  - ②子どもだけで水遊びをさせない。(特に乳幼児は10cm程度の深さでもおぼれる可能性があり、水がためられる場所は屋内外に関わらず注意が必要。)
  - ③水辺の危険性を知り、普段から子どもにも教える。
  - ④浮輪などの安全グッズは正しく使用し、その安全性を過信しない。
  - ⑤こまめに休憩をとる。(水遊びは体力を消耗する。)
  - ⑥誤って水が口や鼻から入り、咳込んでしまった場合は、一度水からあがって、落ち着くまで様子を見る。(鼻と耳はつながっているため、鼻から水が入ることで、耳の平衡感覚が鈍り、おぼれる場合がある。)
  - ⑦万が一に備え、応急手当(心肺蘇生)の方法を学んでおく。
- 以上の点に気をつけて、水の事故から子どもを守り、楽しい夏を過ごしましょう。



## 熱中症は日常生活で注意することが大切です。

川口市立医療センター  
救命救急センター

医師 中野 公介



梅雨が明けて、熱中症の患者さんが搬送されてくると、リスクの高まる夏が来たことを実感します。今、熱中症は、適切な予防法で防げ、適切な応急処置により救命できます。

### <どのような症状があるのか>

熱中症はⅠ度からⅢ度(重症)まで分類されます。主な症状は、Ⅰ度:めまい・失神、筋肉痛・筋肉の硬直、大量の発汗、Ⅱ度:頭痛、気分不快、吐き気・嘔吐、倦怠感、虚脱感、Ⅲ度:意識障害、けいれん、手足の運動障害、高体温などがあります。

### <熱中症を疑った時に何をすべきか>

熱中症を疑った時には、重症の場合は救急隊を呼ぶことはもとより、現場ですぐに身体を冷やし始めることも重要です。

### 現場での応急処置

- 涼しい環境への避難:風通しのよい日陰やクーラーの効いている室内へ避難させます。
- 脱衣と冷却:衣服を脱がせて、露出させた皮膚に水をかけて、うちわや扇風機で扇ぐことにより身体を冷やします。
- 水分・塩分の補給:応答が明瞭で意識がはっきりしていれば、スポーツドリンクなどを飲ませます。意識がない場合は経口摂取は禁物です。
- 医療機関へ運ぶ:自力歩行可能であれば付き添って受診し、重症であれば救急車を呼んでください。

## 防犯

### 振り込め詐欺にご注意

「自分は大丈夫だと  
思っていますか?」



息子や警察官、市役所職員などをかたつた振り込め詐欺が多発しています。悪質・巧妙な犯罪被害に遭わないよう注意しましょう。

### ◇こんな電話は振り込め詐欺です

- ・「携帯電話の番号が変わった」
- ・「風邪をひいてのどの調子が悪い」
- ・「会社のお金を使い込んでしまった」
- ・「会社の小切手入りのかばんを落としてしまった」
- ・「あなたの個人情報漏れています」
- ・「キャッシュカードが悪用されています」
- ・「銀行協会の者がカードを預かりに自宅へ伺います」

### ◇被害を防ぐためには

- ・「医療費や保険料の還付金がある」ので、携帯電話を持ってATMに行ってください。
- 「おかしい?」と思ったら、とにかく電話を切りましょう。
- (話を聞く必要はありません)
- 在宅中でも常に留守番電話にしておきましょう。
- 日ごろから家族や親族と連絡を取り合いましょ。
- 犯人グループの多くは、住所や氏名が載った電話帳(ローペー ジ)を使っています。NTT東日本(☎116)に電話すると情報を削除できます。

### 相談窓口

川口警察署 ☎048(253)0110  
武南警察署 ☎048(286)0110  
問い合わせ:防犯対策室  
☎048(242)6361



## 繰り返してはならない悲劇を語り継ぐ

昨年、東日本大震災で津波から逃げ惑う人々をテレビで見、防空壕をめぐって走った自分と重なった。あの日の恐怖がよみがえった。ゴォーという爆音とともに遠くの空から飛行機が自分に向かってくる。とっさに近くの植え込みに飛び込むと、今いた道には銃弾が打ち込まれていた。恐怖に耐えながら隠れていると、辺りには、空襲警報が鳴り響いていた。

昭和4年、神根村に農家の4人兄弟の長女として生まれた。食料が底をつくほどではなかったが、病弱な母に代わり、幼いころから兄弟の面倒を見ながら、畑仕事や近くの機屋(はたせ)さんで必死に働いた。「今はお金を払えば何でも手に入る。当時は本当に物がなく、つらかった」。それでも、足りないものはみんなで工夫し、しのいだ。今はビニール製の縄跳びも、わらで編んだ。今よりもずっと使いやすく、大切に使った。「そんな事を伝えたいと思って、ポイイスカウトに手作りのお手玉を持っていったの。すごく喜んでもらえてね。今はこれくらいし

戦争の悲惨さは体験した人にしかわからない。二度と繰り返してはならない悲劇を語り継いでいく人々の声を、次代に語り継ぐことが、今を生きる私たちの使命ではないだろうか。(ま)



柳谷 みよ子さん(中青木)